

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

阿彌陀經

高楠順次郎



阿彌陀經

高楠順次郎



目次

總說……………五

阿彌陀經……………一〇

經名 佛說阿彌陀經  
譯名 姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

序文 序分……………一三

如是 我聞

舍衛國祇樹給孤獨園

大比丘衆千二百五十人

皆是大阿羅漢

諸菩薩摩訶薩

釋提桓因等無量諸天

本文 正宗分……………三五

一 極樂世界……………三五

方位—名義—主佛—今現在說法—無有衆苦

二 極樂國土の依報莊嚴 一……………三六

七重欄楯—七重羅網—七重行樹—四寶圍繞

三 極樂國土の依報莊嚴 二……………三九

寶池—階道—樓閣—蓮華

四 極樂國土の依報莊嚴 三……………三〇

天樂—金池—六時雨華—衣祴盛華—他方佛

供養—食時還國—飯食經行

五 極樂國土の依報莊嚴 四……………三一

雜色之鳥—法音宣流—微風吹動—寶樹羅網

—百千種樂—同時俱作

六 極樂國土の正報莊嚴 一……………三六

阿彌陀佛—光明無量—壽命無量—人民壽命

無量—成佛以來十劫—聲聞衆無量—菩薩衆

無量

七 極樂國土の正報莊嚴 二……………四〇

衆生阿鞞跋致—多有一生補處—算數不及

八 念佛往生の勸化 一……………四一

衆生聞者願生彼國—諸上善人俱會—處—少



善根福德因緣往生不能

九 念佛往生の勸化 一……………四二

聞說阿彌陀佛—執持名號若一—七日—一心  
不亂—臨終現前—心不顛倒—即得往生—我  
見是利—當發願生

一〇 六方佛の證誠 一……………四四

東方—阿閼鞞佛—須彌相佛—大須彌佛—須  
彌光佛—妙音佛—出廣長舌相—說誠實言—  
不可思議功德—一切諸佛所護念經

一一 六方佛の證誠 二……………四五

南方—日月燈佛—名聞光佛—大焰肩佛—須  
彌燈佛—無量精進佛

一二 六方佛の證誠 三……………四六

西方—無量壽佛—無量相佛—無量幢佛—大  
光佛—大明佛—寶相佛—淨光佛

一三 六方佛の證誠 四……………四七

北方—焰肩佛—最勝音佛—難沮佛—日生佛  
—網明佛

一四 六方佛の證誠 五……………四七

下方—師子佛—名聞佛—名光佛—達磨佛—  
法幢佛—持法佛

一五 六方佛の證誠 六……………四七

上方—梵音佛—宿王佛—香上佛—香光佛—  
大焰肩佛—雜色寶華嚴身佛—沙羅樹王佛—  
寶華德佛—見一切義佛—如須彌山佛

一六 開經開名の功德……………四八

一切諸佛所護念經—聞諸佛所說名及經名者  
諸佛護念—不退轉—願生彼國者亦不退轉—  
已生今生當生—信者願生彼國

一七 世尊に對する諸佛の稱讚……………四九

相互稱讚不可思議功德—行甚難希有之事—  
五濁惡世成正覺—說一切世間難信之法—是  
爲甚難

結文 流通分……………五三

舍利弗及諸比丘一切世間天人阿修羅等聞佛所說  
歡喜信受作禮而去

阿彌陀經逆讀講讚……………五三

### 總 說

阿彌陀經は、淨土三部經の中で、最も簡潔にして要を得た經であつて、普通に、これを小經と呼び、朝夕の讀誦にも最も適した聖典である。その故でもあるまいが、阿彌陀經は現存の一切經の中で最も廣く世に行はれて居る。先年南條博士と俱に安南に遊んだ時に、その地方到る處の寺院でこの經典を讀んで居るのを見て「最も驚く彌陀感化の遍きを、また極東より極南に至る」と云ふ句を得たことがあつた。支那四百餘州は勿論、南方の安南、北方の滿洲、朝鮮半島から日本本土にかけて一般に用ゐられて居る。實際の禮拜に於ては讀むものも、讀まないものもあるであらうが、大陸、半島の各地は、その禪念佛の混合宗である以上、阿彌陀經を知らないものはない。殊に日本に於ては、これを讀誦する宗門は、先づ淨土宗、眞宗、時宗、融通念佛宗、天台宗である、淨土門ばかりでも、日本國民の大半を占めて居ると云ふのであるから、これに天台宗を加へて居る以上、阿彌陀經は日本人の最大多數の信仰を代表して居ると謂つて差支ないのである。

一般に簡短に要領を得た經典は、廣汎の經典から拔萃して抄略したものが多く、阿彌陀經も僅に百二十一行一千八百八十二字の中に、現世に於ける欣求淨土の起因から説き起した觀經と十劫の昔に於ける悲願成就の本因か



ら説き起された大經とを合せて、誓願の結果として出来上つた淨土の依正えしやうと往生の因果とに關することを抄出したものゝやうに思はれるが、これは單なる外觀から一見した考で、精しくその内容から視れば、丁寧なる極樂莊嚴の縮圖であつて、而も濁惡の世に對する懇切なる念佛往生の化導である。殊に靈鷲山初説の聖典ではなくて、祇園精舎再説の要經である。一たびこれを梵文の原典から見れば、一切經の中でこの阿彌陀經ほど梵漢原譯の合する經典は類例が少ないのである。この極樂莊嚴の要經を今古の名文を以て舊譯界の巨頭たる羅什三藏が譯出したのである、これは新譯も超出することが出来なかつたのである。

斯くの如く、阿彌陀經は、最も廣く讀まれたる最も簡短なる小經であつて、梵文とも好く合して居り、漢文も譯經中の最上乘なるものである、殊にこれを阿彌陀經と稱する所以は、經中の正報たる佛身の光壽二無量を説くことが最も適切に而もその要を得て居るからである。光明無量の故に阿彌陀と名け、壽命無量の故に亦阿彌陀と名けられ、佛名の後半たる阿婆アハ〔光明〕及阿庚アト〔壽命〕を略して、光壽二無量に對して阿彌陀の三字を以て通稱してある、これは譯出の最も巧みなる表現である、この章段にある阿彌陀の音譯から取つて阿彌陀經と名けられたものであらう。この音譯がやがて南無阿彌陀佛の六字の尊號となりて東洋全土に流布するに至つたのである。大經にも光壽二無量の段はあるが極めて煩はしく説いてある。

凡そ法藏菩薩の四十八願の中で、大抵の誓願は皆國中の人天(十六度)か、國中の菩薩(九度)か、他方の菩薩(七度)か、十方世界(六度)か、十方衆生(十八、十九、廿の三度)かの爲に誓はれたものであるが、佛自身の爲に誓はれたものが唯二つある、それは、第十二願の光明無量と第十三願の壽命無量との二つである。而もこれはやがて彌陀同體の果上位に達すべき不退位の衆生の爲の誓願である。梵本の經題は大經と同じやうに極樂莊嚴〔スカープティーヴェーハ〕であり、小經に見ゆる經名は一切諸佛所護念經〔サルヴブッダパリグラハ〕であるにも係らず、殊に阿彌陀經と題した所以は、羅什の小經譯文中に梵音不譯のままに標出してある阿彌陀の名が十一度顯はれて居る、特に佛名を專有して經題とした所以はこゝに在ると思はれる。

阿彌陀經は、予に取りては誠に思出の深き聖典である、今からは四十五年も昔のことであるが、牛津大學在學中、毎晩ノーム樹園のマクス、ミューラー博士の邸を訪ひ、食後の爐邊に博士と俱に梵文小經を讀んだのは他の學生には羨望せらるゝほどの特權であつた、當時大乘研究には獨得の見地ありと目せられた博士も、何としても萬行諸善の小路から脱却することが出来ず、殊に本願の大道に對しては兎角不快を感じ、小經の一七日執持名號で救濟さるゝと云ふに至つては寧ろ反感を以てこれに對せらるゝ風であつた、その實を博士自身が大無量壽經譯の序文(九頁)に述べて居らるゝよりは一層甚しい反感であつて困つたのである、最後に予は那先比丘が希臘系最初の佛敎王たるミリンダ王に答へたる臨終念佛の故に救はるゝ理由を提出して、「石は小なりと雖も水に沈むのであるが、百萬貫の石も船に乗せたら浮かぶではないか」と云ふことを力説したことがあつた、その後は少くと



も予に對しては淨土門の批評はせられなかつた。東方聖書集に觀經の英譯までも入れることを思立たれたのはその後のことであつた。

何にせよ、當時は佛教の研究は、小乗も、大乘も、到る處探り足で實はまだ言語研究の範圍を脱せない、吠陀の思想にある死後「郷里に還る」〔アスタムガタ〕は「西方に往く」と云ふ意で日没の意でもある、淨土の思想はこれから出たとか、「無量光明の土」は吠陀と共通であるとか、「アミダ」は「アムリタ」〔不死〕から轉じ毗濕拏思想の轉化であるとか、甚しいのは阿彌陀の崇拜を耶蘇教の移入であつたとか、随分思ひ切つた空想が行はれたのであつた。マクス、ミュラー博士が最後まで固執したのは、極樂世界の説は毗濕拏神話の變形である云ふことであつた。この神話に護世天の天國が畫き出されてある、その中に婆樓那天ぼろうなの天國は西方に在る、その名は「ムクチャー」〔主要〕とも云ひ、スッカー〔極樂〕とも云ひ、ニムローチャニー〔日没〕とも云ふのである。茲にスッカー〔極樂〕と云ふのがスッカーヴェティー〔極樂國土〕の前型であると云ふのである、お互に似通ふ思想は何處にもある。一方が他方から借らなくてはならぬ理由は決してない、先後を説くなれば寧ろ佛教の極樂信仰がブラーナ神話よりは遙かに先驅を爲して居るかも知れぬ。殊に淨土思想が耶蘇教から出たと云ふことは滑稽極まる話である、これも佛教が遙かに前時代のものであるに相違ない、印度には舊約全書の創世記の如き神話は幾つも聖典に存在するのである、殊に印度は、耶蘇教から借らなければ淨土思想が出ないと云ふやうな思想の沙漠ではないのである。

トマス印度宣教記に因みてこの説を主張したダールマン博士は、後に上智大學の教授として日本に來り東京帝國大學の講師として勤めたことがある、その時に予に向つて「淨土門が耶蘇教から出たとの主張は自身の前半生の夢であるから、それに就ては批判してくれるな」と笑ひ話をしたことがあつた。併し、時には元の成祖忽必烈の中書省副使であつたマルコ、ポーロが廣東の五百羅漢寺の羅漢となつたり、悉達太子の菩薩がヨサフハト・バームとして舊教の聖祖の内に加つたりして居るやうなこともないではないが、斯る事實は決して深い意味を以て見るべきではない。今茲に阿彌陀經の講讀を爲さんとするに當りて、往事を回想して記憶に浮べるまゝを録出した所以は將來如上の覆轍を蹈む人のないやうに豫め注意を喚起せんとしたのである。



## 阿彌陀經

10

小經の内容は、これを三分して説明するのが普通である、序文と本文と結文とである、これを正式の言葉で言へば、序分、正宗分、流通分と云ふのである。序分と云ふのは「如是我聞」と書き出してゐる處から「無量諸天大衆俱」と云ふ處まで、大抵は經の説かれた時と處と聽衆の數とその名前とが書いてある、時にはその説かれた因縁が精しく書き立てゝあることもある。聽衆も大乘の經には名前が一々擧げられてあり、その種類が區分してあるが小乘の經には名前や種類を精しく擧げた經は殆ど皆無である。兎に角、斯る説法の時處所縁に關する部を序分と名けるのである。正宗分とは經の本文のことで、經の主要分で、これも亦幾項目にも分れるのは勿論である。小經では「爾時佛告長老舍利弗」から終りに近く「說此難信之法是爲甚難」までの本文全部を指すのである。正宗分は普通には、極樂の依正二報を讚する部分と念佛往生の因果を説く部分との二大別として講讀するのである。この正宗分は正しく大經の内容を縮圖にして示したものと謂つて差支ないのである。流通分と云ふのは、經の結文のことで、この經を誰に付囑するとか、誰が聞いて歡んだとか、經の趣旨が世に流布せらるゝ因縁を書いた部分である。小經では「佛說此經已」から「作禮而去」までの結文である。今も大略この内容分類に隨つて要所々々を解説して佛法光讚の一助と爲さんとする。

### 經名 佛說阿彌陀經

小經の梵文に見ゆる經名は、前に述べたやうに、「極樂莊嚴」(ハスカイヴァデーヴァーハ)と云ふのである、經中に見ゆる經名は「一切諸佛所護念經」(サルヴブッダパリグラハ)としてある。然るに殊にこれを阿彌陀經とした所以は、小經の中に、本尊の名を單に「阿彌陀」と音譯して、而も十一遍も用ゐるから起つたのである。本尊の名は第十二願に相應して「無量光」(アマタ・アーバ)であり、第十三願に相應して「無量壽」(アマタ・アーユス)である。この二無量は、佛としても法身の理想であるが、人間としても無限の理想である。然るにその一名を採れば他名は略することゝなる、これは梵名でも譯名でも同じ悩みがある、そこで梵名を不譯のまま用ゐて、而も光(アーバ)壽(アーユス)の二別を捨てゝ雙方に通じた「阿彌陀」(アマタ)を取つて通用したのは如何にも巧みな便法である。而も經名としては、その依報莊嚴えほうじょうこんに依て極樂莊嚴とするも、その正報莊嚴しょうほうに依て阿彌陀經と云ふも、その意趣に於て變りはないのである。

### 譯名 姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯

鳩摩羅什(クマラジヅ)の父鳩摩羅炎(クマラアーヤナ)は天竺の人、世々自國の首相であつたが自らその地位を捨てゝ出家し、東葱嶺を渡つて中亞沙漠地方の龜茲(クツチャ)國に來た、時の國王迎へて國師とな



し、而も逼つて王妹を娶らしめ、鳩摩羅什を生んだ。父羅炎、印度より梅檀の佛像を負ひ沙漠を渡つて龜茲國に將來した。晝は羅炎、佛像を負ひ、夜は佛像、羅炎を負ふて跋渉したと云ふことである。羅什の母ジューは聰明で出家して道果を得た、羅什七歳母に隨つて出家し、西天に遊學し、學識卓越、最も大乘に通じた、還て龜茲に居る。時に秦主苻堅建元十九年(A. D. 383)將軍呂光をして龜茲を伐たしめ、羅什を獲て還り涼州に至る、呂光は苻堅が敗れたと聞き自立して涼王と爲つた。後秦の姚興、起つて涼を滅し、羅什伴はれて長安に入る、姚興迎へて國師と爲し、逍遙園に在つて譯經に従はしむ、宣譯三百八十餘卷、入室の弟子四聖十哲皆顯はる、門下總べて三千人ありと謂ふ。梅檀の瑞像亦羅什と共に中夏に入り、宋代に東大寺凋然入宋し、博士張榮をしてこれを模造せしめ、歸朝の後これを嵯峨の清涼寺に安置した。羅什は日本にも間接に縁のある三藏法師である、三藏法師とは經藏、律藏、論藏の三藏に通じたる法師と云ふことで、譯經に従事したものでなくてはこの名は得られない。日本でも三藏と稱せられた高僧が唯一人ある、興福寺留學生靈仙三藏である。三藏は傳教大師弘法大師と共に入唐し、般若三藏の譯場に在つて首座となり筆受の役を務めて、心地觀經を翻譯した人である。

羅什は秦王の詔を奉じて弘始七年(A. D. 403)に小經を翻譯した、これは羅什が長安に入つた翌年でまだ三十有餘歳の若盛りの翻譯である。而して小經は三藏の譯經生活の初頭に於て譯出せられたものである。小經は當時廣く印度から西域地方に行はれて居つたものであらう。

## 序文

如是我聞 一切の經は聞の教義である、佛の理想を聞き弟子の心の導きとすれば足りるのである。これに反して一切の律は制の教義であつて、弟子が罪を犯すに隨つてこれを制せられたもので、これに背くものは直ちに教團の制裁を受けなくてはならぬ。經は凡べて阿難が自ら聞いた所を是の如く我聞くと前置きして話したものと云ふのであるが、これは王舍城の南山石室の講堂で行はれた小乗の一切經結集の話である、小乗の一切經結集では、大迦葉が總上座となり、阿難が經の上座となりて經藏を結集し、優波離が律の上座となりて律藏の史傳を結集した、而もこの小乗の結集を辯說第一の富樓那尊者は承認しなかつたのである。尊者は「一切經の結集は如何に完全に爲されても、予には關係はない、予は自ら佛より聞いた所を傳持する」と宣言したのであつた。それであるから阿彌陀經は阿難が聞いたのか誰が聞いたのか不明である、小乗の一切經も無字の一切經であつた間が、凡そ五百年であるから、現存の有字の一切經から見一切を判斷し得たとするのは錯誤である。加之、大乘の一切經は曾て結集したことはなく、各時代に佛法東流の波に乗つて支那に入り來つた三藏や、遠く流沙を渡つて西天取經の功を成した高僧が、一筭一函、携帶し來つた黃卷赤軸が遂に積り積つて五千四十八卷の一切經となり、



七千餘卷の大藏となり、遂に東土の著作を合して一萬三千卷の大正大藏經となつたのである。

上示の如き實狀であるから、如是我聞とあれば何時も阿難の聞き傳へたものとするのは錯覺を來す根元となるから、我々は經中に見ゆる事實から推して聞の教義の聞持者を決してなくしてはならぬ。殊に大乘の經典には多く聽衆の連名があり、聽衆の種類が分説してあるが、これは小乗の經には滅多に無いことである。諸種の點から推して見て、小乗の形式を以て大乘經を解することは間違を起す基であるから、大乘經は獨立に考ふべきである。小經は經の内容から見れば、舍利弗がその對機であるから如是我聞の主は舍利弗と見るのが最も適當である、これなれば間違のない話である、釋尊淨土門の説法は阿闍世王即位と同時に佛入滅の前八年である、而し觀經は舊王舍城北門外の新王舍城の王宮に於て説かれたものであるが、これは淨土門の序説とも謂ふべきもので、大經はその後間も無く靈鷲山上に於て爲された淨土門の廣説である、それをその後の或年に、まだ一の弟子舍利弗も、二の弟子目連も存生中に祇園精舎に北上せられて淨土門の略説を爲されたものがこの阿彌陀經である。斯く淨土門の初説、廣説、略説とも、佛世五十一年の最後八年間に行はれた説法である、智慧第一の舍利弗も、神通第一の目連も佛の涅槃を見るに忍びずと言つて佛が却後三月涅槃に入ると宣言せらるゝや否や入寂したと云ふことである。

## 舍衛國祇樹給孤獨園

印度の舍衛シヤヘイ〔シユラージュステイ〕城は現時はサヘットマヘットと云ふ處であるが、

今に城の周圍に繞らした土堤が残つて居る、その内面も荒蕪の地で灌木が繁茂して居るが、この地下から雨後は月氏時代の古錢が洗ひ出されることがある、城の一隅に煉瓦の建物が残つて居る、須達長者が孤獨者の爲に炊き出しをして給養した處でもあらうかと想像されるものである、勿論長者當時のものではないが、同じ記念事業を續けたものであるかも知れぬ。今まだ發掘が行はれて居ないから何も判明しない。

城の南門を出て五六丁も南に行くと少し小高くなつた廣い地面がある、大部分發掘されて、井戸や僧房や佛の香室と覺しき跡も皆發掘して保存の爲に修復せられて居る、これが祇園精舎であつて、經に見ゆる祇樹給孤獨園である。須達長者は王舍城に親類の長者があつて南行した時には、佛の説法も聞き、いつしか敬虔の信者となつて、何とかして、王舍城の竹林精舎のやうなものを作つて佛に献上したい、生憎、舍衛國は平原地であるから、寺を建てる高地がない、時の祇多ギタ〔ゼータ〕太子の離宮がある、これが少し小高い地域で僧園に適して居る、長者は太子にその土地を譲るやうに願つた、太子は聴かない、戯れに離宮の全地に黄金を敷きつめたら譲つてやると言つた、長者は即時に牛車に乗せて黄金を持出し御苑の土上に敷きつめた。太子はそれを見て喫驚した。そこで自分にも土地を差上げることを許してくれと云つて、まだ黄金の敷いてない宮殿の在る周圍をそのままに太子から佛に献上した、そこで祇他太子の樹林と云ふ名も残された、その他の全地は須達長者の獻上地として給孤獨長者の園林と云ふ名も併稱された、須達長者は親の無い孤兒や頼り所のない獨身者に給施して居つたので世間か



ら給孤獨長者と敬稱せられた。一つの伽藍に二つの名が付けられたのは以上の理由である。祇樹給孤獨園を縮めて祇園と云ふのである。

王舎城靈鷲山が佛の遊履したまひし最南の佛蹟地で、舎衛城の祇園精舎が最北の佛蹟地である、この兩靈地の間を往復されたので佛蹟全體はこの兩城の道筋に當る地方に在るのである、佛は大體隔年にこの兩地の何れかに安居せられたやうである、例へば今年南の靈鷲山で四月十五日から七月十五日まで安居せらるれば安居の終りの自恣（孟蘭盆會の時）が濟むと、北上の旅に上られる、道すがら有縁の爲に說法せられて北の祇園精舎に至り、次ぎの年の安居を過ごされる、北で安居の自恣が終ると亦南下の道を迎られる、若し北上に右畔の吠舍離方面を取らるれば、南下には左畔の阿踰闍方面を通られる。それであるから隔年安居せられたので、靈鷲山にも廿五年居られたと云ふ傳説もあり、祇園精舎にも亦廿五年住まれたと云ふ傳説もある、外の地で安居のことも往々經に見えて居るから、五十一年の安居を全部兩處で過ごされたとは云へない、大體その情態であつたのである。

王舎城の鎮守は、北門を出て右側の毗富羅山（象頭山）に住はせたまふ金毗羅夜叉神である、舎衛城の祇園精舎の鎮守は牛頭天王である、孝德天皇白鳳元年頃に王舎城の人で法道和尚と云ふ仙人が内海から赤穂に上陸し、播州印南郡の大廣山に籠つて觀音菩薩、牛頭天王を祭つて居つた、孝德天皇御惱ありし時召されて宮中に修法した、芽出たく平癒遊ばされた、六王子は羅拜して感謝なされたと云ふことである、宮中に留まること數月、布薩

會や無遮會や大藏會（一切經會）や、十二月八日の齋會をも行つた、この時から民間に佛教が盛んに行はるゝに至つたとのことである。その後播州廣峰山に法華經寺を建てた、その落慶式には孝德天皇親ら御行幸あらせられ供養遊ばされた、後、平安朝になつて内供奉の圓如法師が播州に行き、祇園の鎮守牛頭天王を勸請して京都の八阪に祭つたのが今の祇園神社である。こゝには今でも除夜には火を戴く鴛鴦羅（アンガラ）祭りと云ふ儀式がある、祇園神社の御旅（ヤト）の式も印度の祭祀の式である。別に傳はないが、祇園精舎の鎮守を日本に勸請した法道和尚は、王舎城の人であるから、王舎城の鎮守を勸請しない筈がないから、象頭山の金毘羅神も同じく法道和尚の勸請であらうと思ふ。法道仙人には色々面白いこともあるがこゝには略することとする。

**大比丘衆千二百五十人** 佛門下の比丘衆が千二百五十人の數に達したのは、佛の最初の遊化の結果であつた。尤も佛の眞の最初の説法は苦行林の同行仙、後の五群比丘に對しての説法であつて、それが鹿野苑の初轉法輪である、五仙は悉達太子を墮落せる者と見て、これを見捨て、恒河を渡り鹿野苑（今のサーナト）に去つて俱に修行して居つた。太子來るとも言葉も交さじと相誓つた、併し彼等の三人は太子の親族であり、二人は耶蘇陀羅姬の親族であつた、父淨飯大王の命を受けて太子を擁護しながら修行して居つただけに、太子の墮落には愛憎をつかした、依てその反感も甚しかつた。然るに佛が愈眼近に進んで來られると、その光顏巍巍たる姿から安祥にして歩すと云ふ風貌に見とれて、老仙の橋陳如が先づ頭を下げた、時候の挨拶もする、久し振りの問答も



始まる、悟りはまだ開けぬかと問はるれば、悟りとは何かと問ひ返さねばならぬ、斯くて問答數番の後遂に四諦八聖道の説法もあつた。五仙は五群比丘として佛門下の人となつた。

ベナレス市の長者耶舎の子は偶然にも鹿野苑に遊び佛の威容を拜して、これも門下に跪いた、これは新婚の青年であつた、妻君は夫を尋ねて鹿野苑に行きこれも俱に門下に入つた。長者夫婦は大事の長子が佛門に入つたと聞き、迎への爲に出かけた、遂に兩人ともミール取りがミールとなつた。耶舎の子の青年は當時市中の青年團の團長であつた、その團員は五十名であつた、五十名は團長を尋ねて佛處に行き遂に一同佛前に頭を下げた、耶舎の家に關係ある者二人も入門した、當時同勢六十一人の教團となつた。

或日佛は六十一人を召して六十一の地方に布教すべきを命ぜられた、佛の教は初善、中善、後善と云つて完全なる法である、世の平和の爲に無くてはならぬ法である。一人一地方に向つてその法を弘めよと言ひ含めてそれ／＼六十一の地方に派遣された、自分も一地方に行くと仰せられて、元の苦行の林から成道の地へ向はれた、優留頻羅の邑で毒龍を退治して地方の大仙三迦葉を感化せられ、優留頻羅迦葉の五百人の弟子、那提迦葉の三百人の弟子、伽耶迦葉の二百人の弟子都合一千人の弟子を得られた、苦行林では二人の商侶、三十人の青年をも化せられた。三迦葉の弟子一千人と俱に王舎城に向はるゝ途上では、地方人は佛が迦葉の弟子となられたものと解したのも一興であつた、王舎城に近づかると、そこには已に五群比丘の一人馬勝比丘の態度に心惹かれて、六師外道の一人刪闍夜の弟子たる舍利弗、目連の二人が佛門に入らんとして居る、二人は師の刪闍夜を伴ひ入門して迦葉の例に習はんとしたが、師は頑冥にして聞かず、遂に二人は意を決して師に謝して佛門に走つた、師は二人去るも他の二百五十人の弟子は自門に止るものと信じたのであるが、全衆悉く去つて佛門に歸した、それが爲千二百五十人の同勢となつたのである。佛が王舎城に頻婆沙羅王を教化せられた時は已に千二百五十人の定員に達して居つたわけである。

然るに佛は舍利弗の器量を看破せられ、また目連の神通を知悉せられて、この兩人を三迦葉の上に置かれたのであつた、三迦葉自身は何とも思はなかつたかも知れぬが、その門下には不平の聲が聞えた、こゝで佛は我が淨土門に取つて實に有難い説法があつた。

我が衣に觸れ、我が影を踏みつゝあるものが我に近いものではない、我が正意を知るものが我に最も近いものである、たとひ千里の外に生れ、千年の後に出づるも我が正意を知るものは我に最も近いものである。と云ふ意味の説法であつた。三迦葉が如何に先入者であつても早く來たから我に近いわけではない、舍利弗、目連は已にその道に至れるものであることを含めて柔かに説示されたのである、これは四十二章經の第三十七章にもこれの變形と思はるゝものがある。

佛言く佛子よ吾を離るゝ數千里なるも、吾が戒を憶念するものは必道果を得、吾が左右に在りて常に吾を



見るも、吾が戒に隨はざれば終に道を得ず。

一見その意味に違ひがあるやうだが、その聖意も結局同じことであらう。時間の前後や、距離の遠近や、形式や、戒條は問題ではなく、戒の精神を知るか、法の意味を知るか、心が近いか遠いかの問題である。これでこそ二千五百年の末に生れ、鬪諍堅固の風浪に擾はれつゝある身も、こゝに一道の光明を捕捉し得るのである。

**皆是大阿羅漢** 同開衆の中大阿羅漢十六人が列名せられてある、これは聲聞衆である。聲聞は佛の聲を聞いて悟る直弟のことであるが、それが悟りを開いて供養に相應はしい資格があるやうになつたのを阿羅漢と云ふ、阿羅漢は應供と云ふ意味である。直弟の中でもまだ悟りを開いて居ない阿難のやうなものもあるが、少在屬無で一切十六人を羅漢として列擧したのである。支那で十六羅漢と云ふことは小經の十六列名から起つたものと思はるゝ、この中には十大弟子の七人まで加はつて居る。普通の十六羅漢は師子洲所傳のもので、難提密多羅〔ナンディミトラ〕の法住記（玄奘譯）から出て居るのである。法住記の十六羅漢と小經の十六羅漢と比べて見ると唯三人のみが同一である、他は皆相違して居る。兎に角、十六羅漢には南北兩傳あるものと見て差支ない。殊に小經の十六羅漢は直弟の順序正しく、智慧第一の舍利弗が一位に置かれ、神通第一の目連が二位で、頭陀第一の大迦葉が三位に在る、次に論義第一の迦旃延が四位で、五の俱絺羅、六の離婆多は何者か分らないが、七の周利槃陀迦は、兄半陀迦の賢明に引かへて、愚の標範として名を得たるもの、八の難陀は佛の異母弟で、許婚の孫陀羅

姫を忘れ得ずして屢佛を煩はしたるもの、九位は多聞第一の阿難陀で、十位は佛子羅喉羅、十一は我々の知らない憍梵波提で、大經では牛王とせられて居る、十二は南傳十六羅漢の一位に在る有名な賓頭盧頗羅墮、十三は淨飯大王の内臣であつた迦留陀夷、十四は劫賓那、十五は薄矩羅、十六位は天眼第一の阿菴樓駄である。

斯く同開衆の別名を麗々しく擧げるのは、大乘經の形式で南傳小乘經にはこの例は殆ど無いのである。

### 諸菩薩摩訶薩

同開衆の菩薩衆を擧げたのである。第一位は智慧の代表たる文殊師利法王子である、何故に法王子と稱したか分らない、法王子の梵語はクマラプータであるが、クマラは童又は王子である、プータは實際に世に存した意味に付する語であるから、「眞の王子」と云ふことである、文殊〔マンジュ〕は妙であり、師利〔シュリー〕は吉祥であるから、妙吉祥と譯するが、梵語としては實に折合ひの悪い名である、龜茲國の語でマンジュは王子と云ふ字であると云ふことである、その國語でマンジュシュキーと云ふやうな名であつたのをマンジュシュリーと梵語化したのでないか、月氏王のカニシュキーと云ふものもあるから全く不可能の推測でもあるまい、この推測は曾て佛のシルヴァン・レビー博士が話したことである、さうすると、マンジュシュキー〔文殊師利〕と云ふのもクマラプータ〔眞王子〕と云ふのも、同じ意味となるのである。文殊師利と云ふ王子が入法したのであるから法王子と譯したと見て宜しいのである。それにしても王子は何國の王子であつたか不明である、印度では支那を文殊の本土とし、支那では印度を文殊の本國としたやうである。



雪山中の尼波羅國に自在尊〔ンシブナート〕と云ふ靈丘がある、これは文殊菩薩の廟堂の在る所である、國初の傳説に依ると、尼波羅はその昔、大湖であつた、文殊菩薩がその智劍を以て南方の大巖山を突破り、湖水を一度に放出した、これが南垂の阿拏摩川〔ガンダキー川〕であると云ふのである、文殊の靈廟は雪山邊國の神話と信仰と不可分離のものである。

印度の傳説では、文殊は現に支那の五臺山に化現して居ると云ふので、昔は印度から文殊を尋ねて支那に東來するものもある、日本に來た奈良朝の婆羅門僧正菩薩仙那、臨邑の佛徹法師は現に文殊を尋ねて五臺に至り、文殊は今日本に在りと聞き、入朝して行基菩薩に逢ひ、文殊として奉拜したのであつた。今の滿洲の名は五臺山の文殊〔マンジュ〕から取つた名である、山の名を清涼山と云ふから清國の名もこれから出て居る、現に尼波羅王から清朝に上つた上表書には表初に梵字で文殊師利陛下と書いてあつたと云ふことである。兎に角、文殊の本國は、雪山邊國の尼波羅か、流沙の彼方に在る龜茲國か、支那の清涼山大華嚴寺か知ることには出來ないが、何れにしても智慧の王子の史的存在から生れた實在の菩薩であるのは疑ないやうである、文殊の本國と云つても、何れも屢化現する國土を云ふので、その初生の地は印度でなければならぬ、佛の時に參聽したのであるから、當初の信仰が段々東方に移り、印度から西域、それから支那と化現の本國が東遷したのであらう。

阿逸多菩薩は佛の弟子で佛が補處の菩薩であると説かれ、釋尊に繼ぎて佛位を占むる候補であると預言せられ

た、本名彌勒〔マイトレイヤ〕である、而も南傳十六羅漢中に阿逸多〔アジタ〕の名が見えて居る。南方では彌勒の石像は造つて安置して居るが、まだ見ぬ佛であるから、決してこれを禮拜しない習慣である。軌陀訶提は香象菩薩である、梵本には四菩薩の外に不休息菩薩の名が加へられてある。

#### 釋提桓因等無量諸天

次に同聞衆の天衆が擧げられてある、「釋」〔シヤクラ〕は帝釋天の本名である、「提桓因」は「デーヴーナムインドラ」の略で、天帝と云ふことである、天の主なる釋〔シヤクラ〕と云ふので帝釋と譯するのである、因陀羅とも音譯される、アリア民族の氏神である。佛出世の後は梵天と帝釋天とは佛法守護の神となり常に佛前に奉仕して居る、そこで同聞衆の中に參加して居るのである。梵本小經には、梵天も娑婆界主〔サハーンパティ〕なる梵として參加して居る。

以上序分全部は、阿彌陀經會座の莊嚴が示されてあるのである。講座に集つた聽衆の種類を見れば、大抵その説法の大要は知らるゝのである、勿論大衆向きの淨土教の講話であるから、世の人にも知られた十六羅漢の長老を初めとして、千二百五十人の大比丘衆が列坐し、大乘の諸菩薩摩訶薩〔大士〕から梵天帝釋などの一切天族も參加して居る。人族天族の大導師たる世尊、而も萬機普益の淨土門に相當した聽衆が會座に列つて居るのである。但しこの同聞衆は聽聞の正衆であつて、この外にも多々の傍聽衆があるのである、經の終りの流通分には一切世間天人衆が多く周圍に列坐し、魔神に近い阿脩羅族までが佛説を聽聞する爲に集ひ來つたことが知らるゝのであ



る。實に天人師たる大恩教主の會座に相應はしい大衆が、雲霞の如く佛の師子座の前を飾つて居るのである、斯る會座の莊嚴は實は舞臺の飾りである、舞臺の飾りが出來上つたら、一代の大役者たる世尊の師子吼が初まるべきである。

本文

序分の次に來るものは、所謂正宗分で、正しく極樂莊嚴の光景が説かるゝのである、全篇が皆佛と舍利弗との問答である。問答とは云ふものゝ舍利弗は一問をも發せず一言をも答へず、始から終りまで世尊独自の啓示である。

一 極樂世界

方位—名義—主佛—今現在説法—無有衆苦

先づ佛は長老舍利弗に告げて、極樂國土の存在とその教主が阿彌陀佛であることを示したまひ、更に今現に彼土に在つて説法されつゝあることを教へられたのである。而して極樂と名くる所以を精しくお話しになる、その國の生類には一切の苦がなくて、たゞ一切の樂を受ける、それ故に極樂と名くると説き、さて次に極樂莊嚴の光景を一々説き示さるゝのである。

この段は依報たる佛土と正報たる佛身とを總説されたのである、これは萬行の因に報いた萬德莊嚴の國土であ



るからこれを報土と名ける、又これは願力成就の報土であるから願土とも名ける。その正報たる阿彌陀佛は無量光無量壽を以て莊嚴されたる佛身であるから、その名を阿彌陀（無量）と稱するのである。本願の因に相當した報土であるから、本願を信する以上は報土たり願土たる極樂淨土を非認するわけにはいかない、正報たる教主阿彌陀佛を信する以上は依報たる淨土を非認するわけにはいかない。人間に人間界のあるやうに、佛には佛界の存在するは當然である。されば阿彌陀佛の在す所には必ずその佛土があるのは必然であるから、その淨土の方位を指定することは無用のことであるが、十方世界は悉く佛國であると云ふのでは生類は方に迷ふ恐れがある、十方世界が皆佛國であるなら西方にも必存在するわけである。要するに彼土と此土とは全く隔絶し超越した存在であることを明了に知らせなくてはならぬ、「從是西方。過十萬億佛土。有世界。名曰極樂」と説かれたのはその爲である、十萬億の佛國を過ぎてその先に世界がある、その名を極樂（スカウヱティ）と云ふと、十萬億と云はれては我々には想像もつかぬ、實は西方と指されても、それほどまでに遠い西方は見當がつかないのであるが、遙かに太陽の没する海の彼方や、山の彼方の夕焼けを眺めて、思ひを沈めることも出来る、聖徳太子が四天王寺の西門が極樂の東門に當ると示されたのも、皆我々の信念から起ることである。方位は人間の定めたもので、本來東西はないと云へばそれまであるが、それよりは西天の方位を與へられて、多少でも生類がその心を統一して美しき莊嚴の理想を偲ぶことの可能性を與へられたのは感謝すべきである。佛意は我々の意趣を以て批議すべきではない、淨土に往生するとあつても、必然に死を伴ふ生ではない、無生の生である、涅槃は死であると云つても、人間の死とは違つて不死の死である。されば西方と方角を指してあつても我々の想像にも及ばない無方の方であるかも知れない、何にせよ無碍の佛智から出たことを色々に盲評することは如何なる危険に陥るかも知れない、兎に角、十萬億土を超出した遠い西の彼岸であると教への如くに信じて、曇鸞大師の古智に習ふのが最も適當である、斯る遠い彼土ではあるが失望するには及ばない、毎日一度、我々に親しみある太陽は此土から彼土に一直線に没し去ることを思へば、屈身臂頃即生西方も可能となり、願力の無窮なるを感謝せらるるのである。

極樂國土の教主たる阿彌陀佛は今現在にそこで説法されつゝあるのである、これに對しても、彼佛は今何と云つて説法せられつゝあるかと尋ねるのは淺はかなことである。我々の心の向ふ所に佛の心は向はれるのである、實は佛の心の向ふ所に我々の心は向はしめられつゝあるのである、觀經の上から窺へば、佛は一切衆生の心想の中に入りたまふ、汝の心が佛を想ふ時、是の心佛を作る、是の心是れ佛なりとある、首楞嚴經には衆生佛を憶すれば、現前當來遠からず如來を拜することも疑ひなしとの趣意もある、されば唯心の彌陀、己心の淨土と云ふこともある、去此不遠の淨土と云ふのも同じことである、娑婆即寂光土とも説けば説かるゝのである。されど此土成佛は我々には不可能である、彼土往生の勝因を頼る外はないのである。今この一般に佛土佛身を總標して、



次に佛土の莊嚴を詳説せらるゝのである。

## 二 極樂國土の依報莊嚴 一

七重欄楯—七重羅網—七重行樹—四寶圍繞

第一に、極樂國土の莊嚴を外圍から地區の大體にかけて説き示さるゝのである。印度の實境から得られたる美的莊嚴の理想であるから、その積りで解説しなくてはならぬ。國土の外邊には七重の欄楯〔ヴェーディカ〕がある、欄楯とは玉垣のことである、印度の古い塔廟は皆石の玉垣を以て圍まれてある。それが七重にあるのは此土と違つた所である。七重の羅網〔キンキニージャラ〕が張られてある、羅網と云ふのは金鈴を着けた網で、風の吹く時はその小鈴が鈴々きんくと鳴り響くのである。七重の行樹〔ターラバンクテイ〕がある、七重の多羅樹たろの並木がある、多羅は貝葉と云ふものと同じで棕櫚の木である、行樹は並木のことである。以上の三つが皆四寶で飾られてある、梵本には四寶とは金、銀、琉璃（碧玉）玻璃（水晶）であるとしてある。四寶七寶は印度人の好む所の寶玉が、選ばれてあるのである。

## 三 極樂國土の依報莊嚴 二

寶池—階道—樓閣—蓮華

第二に極樂國土には、七寶合成の池がある、七寶と云ふのは、梵本に依ると金、銀、琉璃、玻璃、赤珠、碼磧、珊瑚である。七寶で成立つてゐる池に八功德の水が湛えられて居る、八功德とは水の性質が澄淨であり、清冷であり、甘美であり、輕軟であり、潤澤であり、安和であり、飲み又浴すれば患を除き、増益すると云ふのである、最後の二功德は熱と渴との禍を除くから除患じよせんと云ひ、六根四大を増養ぞうやくするから増益と云つたのである。斯る水が滿ち溢れて居る、梵本には堤上から鳥が水を飲み得るほどに水が豊かなとしてある、印度では容易に見るべからざる満水の光景である。池の底には黄金の沙が布きつめてある、蓮池には必四方に同廊が作られてある、その一處に石段が設けられて水面に下られるやうに造られてある、これが四邊の階道である、この一切が四寶で合成せられて居る。池の上には樓閣ぼくかくがある、これも亦七寶を以て嚴かに飾られてある。梵本には樓閣が寶樹となつて居る、玄奘譯の淨土攝受經にも妙寶樹となつて居る、前に行樹があつたから樓閣の方が正しいのかも知れぬ。池中の蓮華は大き車輪の如しと云ふのであるから極めて大蓮華である、蓮華は恒河の流域にありて印度河の流域には無いのであるから蓮華は殆ど佛教の獨占である、婆羅門教は蘇摩すまの宗教であるが、佛教は蓮華の宗教である、



蓮華に依て佛教の全部が説明し得らるゝのである、蓮華の種類も極めて多い、青色青光は青蓮〔ウトバラ〕の色と光とである、黄色黄光は黄蓮〔クムダ〕の色と光とである、赤色赤光は紅蓮〔バドマ〕の色光である、白光は白蓮〔ブンダリーカ〕の色光である。この蓮華の香も妙に潔らかなものである。梵本には黄色が雑色となつて居る、或は黄色のことかも知れぬ。色と光の上に梵本には影がある、漢譯では略したのであらう。

#### 四 極樂國土の依報莊嚴 三

天樂—金地—六時雨華—衣袂盛華—供養他方佛—食時還國—飯食經行

彼の佛の國土には常に天樂の聲が聞える、大地は黄金で敷きつめてある、晝三時夜三時、天から曼陀羅華〔マンドラーワ〕と名くる妙華が降り來る。天樂の音と俱に天華が黄金の地盤に降り布くと云ふ誠に麗はしい光景である。その國の衆生も朝早くから花籠に妙なる華を盛り、阿彌陀の淨土以外の十萬億土の佛に供養し、朝食の時までには本國に還り食事を終り散歩する。衣袂は元は衣の襟のことであるが、實は衣の襟のやうに肩から一幅の長い布を膝の邊まで垂れて居るのを云ふので、これで花を支へる風習であつたらしい、後には衣袂と云ふのはその一本ある小竹籠でこれに花を盛り供へる習ひとなつたらしい、梵本にはこの語はない。經行とは唐音で「キンヒン」と読み、梵語は「チャングラマ」と云ふのであるが、今こゝでは遊履「ヴィハーラ」としてある、何れ

も同じ意味で散歩のことである。

玄奘譯の淨土攝受經には常作天樂と黄金爲地と天雨妙華とは三段として、每段の終りに成就如是功德莊嚴で結ばれてある。天樂と金地と雨華とは自然の連絡はあるが、一見木に竹を繼いだやうであるから、元は玄奘譯の如く別段であつたかも知れない。

#### 五 極樂國土の依報莊嚴 四

雜色之鳥—法音宣流—微風吹動—寶樹羅網—百千種樂同時俱作

彼の國には常に種々の奇妙雜多の色彩ある鳥が居る、白鶴は白鳥のことである、孔雀も居る、鸚鵡も居る、次の舍利〔シャリーカー〕は俗に「マイナー」と云ふ九官鳥の類で矢張り物を言ふ鳥である、迦陵頻伽〔カラビンカ〕は美音鳥と譯し音樂には離るべからざる鳥である、天の雀とか郭公とか譯するが結局分らない。共命之鳥は又命々鳥とも云ひ、一身雙頭の鳥だと云ふことである。今の梵本には唯三種（白鶴、鶴、孔雀）のみが出で居る、小經の鸚鵡以下は全く無い。此等の衆鳥が晝三時夜三時和雅の音を出して、五根、五力、七菩提分、八聖道分などの法を演べる、その土の生類はこれを聞いて、佛を念じ、法を念じ、僧を念ずる、不思議の鳥である。ここに五根、五力、七菩提分、八聖道分と云ふのは、涅槃に至るまでの道程に必要な資糧で、この類が全體で三十七



種ある、これを三十七の道品だうひんと名ける、四念處、四正勤、四如意足の三を除いた残りの四品ほんがこゝに擧げられてあるのである。

五根

と云つても普通の五根と違ひ、純精神的のものである、即ち信根、精進根、念根、定根、慧根の五で、言はば菩提の根である。

五力

と云ふのも全く五根の有する力であるから、信力、精進力、念力、定力、慧力の五である。信は法を信すること、精進は奮つて道に進むこと、念は明記不忘みんきふたうで念相續すること、定は心統一、慧は定心の上に顯はるゝ實智である。

七菩提分

數の順で七覺支が前に出で八聖道が後に在るが、實は八聖道は見道（見る道）の修行で、七覺支は修道（歩む道）の修行であるから、前後倒置せられてあるのである。已に見道の目も出來て、見道最後の正定の足が出來たから、次にこの七覺支に由り健全に歩みを運ぶのである、それでも浮き足になり、沈み足になり、右に依り左に依る、そこで七覺支に依つて歩調を齊へるのである、（一）擇法覺支ちやくほふくは法の眞實性を確認する智力を慥かならしむる、（二）精進覺支は勇猛の心を以て努力を續ける力を慥かならしむる、（三）喜覺支は心に善法を得て喜ぶ心を生ずる、（四）輕安覺支きやうあんは身心麤重なる時に輕利安適あんちやくに向はしむる、（五）念覺支は定慧を明記して忘失せず、念相續する、（六）定覺支は心を一境に住せしめて散亂せしめぬ、（七）行捨覺支は、心の動きを捨て平心なるを謂ふ、これは行蘊所攝ぎやういんしよせつの捨の心所であるので行捨と名けられてある、以上は修道の歩調を整へ一意菩提に向つて進まんとする道程の注意である。

八聖道分

八聖道分八つの正しい道を教へる見道の修行であるから八正道とも云ふ、されど正式には八聖道でなければならぬ。佛はアリア民族が人種や階級に重きを置き、民族をアリア（神聖）とするの非なるを力説し、人格を土臺として個人々々がアリア（神聖）なるに重きを置かれ、聖人聖者（アリアプッガラ）の道を教へ、四聖道（アリア、マッガ）八聖道（アリア、アッタングカ、マッガ）、四聖諦（アリアサッチャ）、聖僧伽（アリアサンガ）など悉くアリア（聖）なる文字を冠せられた、これは我々が永遠に忘失してはならない根本の理想である、故に八聖道も常にその根本名稱の一として聖の字を冠することを忘れてはならぬ。八聖道はこれを通俗の世間的に見れば、聖者の道を蹈む人々の倫理である、然もこれを覺路に進む道程と見れば、八聖道は見道修行の初門である。平易に世間的に解すると八聖道は人格完成の要素であるが、出世間的に見れば修道の道程に入る準備工作である。

（一）正見は目である、見道の眼目はこれに在る、世の宗教は修道を教へて見道を教へない、佛教は見る道を先づ教へ、これが正しき道なりと確認して而して後修道の旅に入るのである、盲者の妄動は恐ろしいものである、跛者の明眼も何にもならぬ、正見で目を與へ（八正道で足を與へる）が見道修行の方法である。



先づ(1)正見の目が出来たならば、(2)正思惟で意業を正しくし、(3)正語で口業を正しくし、(3)正業で身業を正しうする。この三は人間の心理的倫理的人格完成であるが、これでは眞の人間とはなり得ない、正思惟は更に進んで明記不忘の念相續となつて(5)正念がなくては用を爲さない、續いて(6)正精進があつて、正思惟で考へたことも、正語で言つたことも、正業で行つたことも、勇猛心を以て努力していかなくてはならぬ。而してこの身口意の三業を憶念持續し、精進し努力して行くことはこれを活かして(7)正命となす所以である、正命とは正しき生活と云ふことである。こゝまで来て生命としての人格が完成するわけである。

八聖道は軽く解すれば世間道であるが、この世間道を、理の上からも、實の上からも、眞智を以て觀察し無漏の三昧定に達するを最後の(8)正定とするのである。こゝまで来れば、純然たる出世間道の行法と謂ふべきである。八聖道は見道の行法であつて、人生を正觀して邪見、邪命、邪定に陥らないやうに枉れるを直うする道でもあるが、同時に修道の行法たる七覺支に進入し得べき正定の足を作る準備である、言はゞ正しき直觀に入るべき正覺への旅立ちの資糧である。七覺支は正覺の目標に向つて一路邁進する最後の道程である、この修道を終ると目標たる無學道へ到達するのである。

以上五根、五力、七菩提分、八聖道分は、自力聖道の教であるが、これを淨土門他力の教に移して見れば五根の最初を飾る信根からして他力廻向の賜であるから、五根、五力は勿論、七菩提分、八聖道分までも、我々信

後の修養の資糧となるべきものである、この修養の資糧を我々は實生活に生かして行かなくてはならぬ、恰も五戒のやうなもので、戒律としては我々に用なきものであるが、我々の實生活に於ては、例せば不殺生の如き、これを實際に行へるものは眞宗の信者がその最たるものである。さう云ふ風に信力、精進力、念力、定力、慧力を修養の上に生かす者は眞宗であると云ふ風に進みたいものである。

極樂國土の色々の鳥が、色々に和やかな音を出して、五根、五力、七菩提分、八聖道分と云ふやうな佛法を轉りつゝあると云ふのである、これは轉りつゝある鳥よりも、聴きつゝある衆生の心が佛力により成熟せしめられて居るのであり、且極樂の土徳であるから、自然に法音を解して直ちに佛を念じ法を念じ僧を念ずると云ふやうな功用が顯はれるのである。

世尊は懇切にも鳥の性質を示されてゐる、この鳥は過去の罪業の報で畜生に生れたものと思つてはならぬ、この國には三惡道(地獄、餓鬼、畜生)はない、彼土には三惡道の名すらない、況やその實のあるべき理はないと明らかに説き示さるゝ、然らば何故に斯くの如き鳥が存在するかと云ふに、これは阿彌陀佛が五根、五力などの法音を宣べて流布せしめんと欲して、變化して作られたものである、そこで實の鳥ではなく化鳥であると明かに示されたのである。

化鳥が轉り立てゝ法音を演べて居るのみでなく、自然の風の吹き動く時は、寶樹の枝も、寶網の鈴も、俱に微



妙の音を發する、百千種の交響樂が同時に起るが如くである。これを聞いて自然に念佛念法念僧の心を起す、前の化鳥の音はそのまゝ説法であるから、聞いた者は三寶を念するのであるがこゝの清風寶樹の妙音は交響樂のやうなのであるから、自然に聞者の心が軟かになり三寶を念する心を生ずるのである、こゝに化鳥と風樹との多少の差のあることを知らねばならぬ。

梵本の百千種樂同時俱作に當る句に「チャールヤイヒ」と云ふ語がある、初校訂者のマクス、ミューラー翁もこれに満足して居られなかつた、「チャ」は上に就く別字として「アールヤイヒ」を「聖者に依て」として出版もし翻譯もせられたのである。荻原博士は昭和六年十二月淨土三部經に第二の校訂者として「ブーダカイヒ」奏樂者に依て」と改めた、今又昭和九年十一月大乘社から出た梵和對照阿彌陀經に阿滿得壽君は、古寫本から見て「チャーローホ」〔美はしき〕(Cāro の屬格)として第三の校訂を試みて居る、これは誠に適當の語で、音韻和雅などと云ふ時には「チャール」は能く用ゐらるゝ語であるから、これは正しい最後の訂正であると思ふ。

## 六 極樂國土の正報莊嚴 一

阿彌陀佛—光明無量—壽命無量—人民壽命無量—成佛以來十劫—聲聞衆無量—菩薩衆無量

彼の佛は何が故に阿彌陀「アマタ」と名けらるゝや、彼の佛の光明無量にして十方國土を照らして障礙なし、故に阿彌陀と號せらるゝと佛の自問自答である。この文から見ればこの阿彌陀は「アマタ・アーバ」の略で無量光と云ふ語である。次に又彼の佛の壽命及其の人民も無量無邊阿僧祇劫である、故に阿彌陀と名くとある。この阿彌陀は「アマタ・アーユス」の略で無量壽である、こゝに其の人民もとあるけれどもこれは梵文のやうにこの人民の壽命でなければならぬ、何故かと云へば、阿僧祇劫「アサンケーヤカルパ」とは無數劫と云ふことで人民の數でなく、壽命の期間たることは言ふまでもない。法藏菩薩四十八願の中で、光明無量は第十二願に、壽命無量は第十三願に誓はれてある、前にも述べた通り、四十八願中唯この二願のみが阿彌陀如來の自己に關する本願である。故にこの二願の目的がそのまゝにその佛名となつたのである。而してその國中の人天の壽命は更に第十五願に説かれてある。國中の聖衆の數の無量は第十四願に説かれたのである。これらの全部がこの一段に説き出されてある。

阿彌陀の成佛以來今に十劫であることは、大無量壽經に説かれたのであるから、それをそのままに復説してあるのである、これを親鸞聖人は十劫は再成の時期で、その實は久遠の昔に成佛された佛であるとして久遠實成、十劫再成とせらるゝのである。「彌陀成佛のこのかたは、今に十劫と説きたれど、塵點久遠劫よりも、久しき佛と見えたまふ」とありて、十劫の昔も、久遠の昔も、同じやうに成佛なされたのであるから、十劫再成の話はそのまゝ久遠の昔にも當てはまるのである。たとひ十劫と限られてあつても、無時の時であるから久遠も同じこと



でなければならぬ。

この段で我々が最も注意すべきは、光明無量と壽命無量との意味である、凡そ世間的に思索の世界で考へたとしても、又出世間に冥想の世界で考へたとしても、大抵、絶對とか無限とか永遠の生命とか云ふことに歸するのであるが、絶對を唯一と考へるやうな低級な思想は佛教は所有して居ないし、又人間の生命がそのままに永遠に持續すると云ふやうなことは佛教者の期待する所ではないのである、我々の生命は生れながらに永遠の生命であつて、生命を斷ち切ることは我々には絶對に不可能である。我々は恒に生々死々して居るのであるが、生は明かに我々の眼に映じて居るが、死は全く知ることが出来ない、死後は全く寸前闇である、それ故に生類は死を恐れるのである、一切生類は何れも生命欲を有するのはそれが爲で、人間は殊に生命を發揮し、生き甲斐のある人間たらんことを欲求するまでに進んで居るのである、愈止むなく死に臨むとしても、名譽に生きるか、事業に生きるか、遺著を残すか、遺言を残すか、この生きんとする心が我々を永遠に生かしめるのである、これは人間生々の意欲である、この生々の意欲が亡くならない限りは永遠に我々は自己を創造し、永遠の生命を持續しつゝあるのである、佛の悟りは、「我が生は既に盡きたり、再び生を受くることなし」と云ふ知見であつた、然るに佛教者が斯る永遠の生命を要望することはあるべき筈はないのである、況や阿彌陀佛が斯る永遠の生命を誓はるゝわけはないのである。何となれば我々の生は闇から闇への永遠の生命であるからである、我々生類の望む所は斯る闇

黒の永遠性ではなく、智識欲と俱に生きる明<sup>ま</sup>みから明<sup>ま</sup>みへの永遠の生命である、迷妄の世界の永遠性でなく、覺悟の世界の永遠性を望んで居るので、迷の存在を捨て、覺の存在に憧憬がれて居るのである。その覺の世界を無量光の世界と云ふのである、これは佛のみが經驗せられた所である、光明と云ふのは、物質的の光明ではなく、精神的の光明であるから智慧を表するのである、智の無限なるを表するのである、無限を空間的に表したのである、言はゞ無限の空間的存在である、更に無限を時間的に表したものの、言はゞ無限の時間的存在が壽命無量である、故に一は智識欲の完成であるが、他は生命欲の完成である、曾ては盲目の生命欲であつたのが今は光明ある存在となつた、その生命が永遠性を有したのである、永遠の生命と云ふものが別に在るのではなく、智慧即ち覺の存在が永遠に續くと云ふのみのものである、これを壽命としてある所に無上の味がある、而して一切生類は恒にこの壽命を得んとして何時までも生きんとして居るのであるから、その生命欲を満足せしめらるゝことは無上の慈悲と謂はねばならぬ、この點から云へば壽命無量は慈悲の無限を表したものである、これを佛徳に表して見れば智慧窮極慈悲圓滿即ち悲智圓滿の完全位であるが、これを佛身に顯はして見れば、光明無量、壽命無量即ち光壽無量の大覺位である、哲學で夢みた無限の理想もこれで満足せらるゝ、宗教が生んだ最上善もこゝに實現せられたわけである。人間の生命欲智識欲も完全に満足せられたのである、覺の世界の永遠の生命が報いられたのである、斯くして一切生類を成熟して最上無上の覺位に導かんとするのが光壽二無量の阿彌陀である、これを光



明化せられたる存在が永遠性を有することを確保せられたと謂ふのである。

### 七 極樂國土の正報莊嚴 二

衆生阿鞞跋致—多有—一生補處—算數不及

極樂國には、衆生の生れし者は皆阿鞞跋致に住して居る、即ち不退位である、再び樂土から退轉することはないと云ふ意である。不退轉の梵語は、小經では「アヴィニヅルターニヤ」であるが、大經の第四十七願の梵本では「アヴィヅルティカ」である。小經の音譯から見れば後者の方が適するやうであるが兩語相通じて用ゐらるのであるから何れでも宜しいであらう。而してその衆生が菩薩と同格であることは、次の「多くは一生補處である」と云ふ語からして明白である、一生補處は第二十二願に誓はれたもので彌勒菩薩と同じやうに、今一度生れた時には、前佛の地位を填むる如來の候補であると云ふことである。一般の生類に取つては非常の特權であると謂はねばならぬ。而して斯る特權を有するものが算數の及ばないだけ澤山存在する。梵本では「單に無量無數〔アサンケーヤ〕と言つて數ふるより外はない」とある。然るに小經の本文では「但無量無邊阿僧祇〔無數〕劫を以て説く可し」とある、この意は若し説くとすれば、無量劫の時間を費やして説く外はないと云ふのらしく、何れにしても往生者の無數なるを示したものである。

### 八 念佛往生の勸化 一

衆生聞者願生彼國—諸上善人俱會一處—少善根福德因緣往生不能

この段以後は題目が全く異つて居る、今までは極樂國土の莊嚴の光景を依正の二方面に分ちて讚嘆せられたのであるが、これよりは極樂に往生し得べき因緣を詳説せらるゝので、言はゞ正宗分中の正宗分である。

極樂國土の功德莊嚴を聞いた生類は、必發願して阿彌陀佛の報土に往生せんと欲しなくてはならぬ。

何故かと云へば、そこでは幾多の上善の人々と一處に會合することを得るからである。前に示された無數の聖衆達と同住することを得るのである、俱會一處と云ふことは、如何にも我々に親しみを感じしむる語である、上善人の仲間となり、父祖と再び團欒することを得る、如何にも喜ばしいことである、この俱會一處の樂土には少々の善根や福德を以て生るゝことは全く不可能であると難信之法の重要性を述べ、生因の特殊性を説示することを豫想せしめられたのである。

### 九 念佛往生の勸化 二

聞說阿彌陀佛—聞名執持若一七日—一心不亂—臨終現前—心不顛倒—即得往生—我見是利—當發願生



この一段は、前段の少善根福德因縁に對して、多善根福德因縁として念佛を勧められたものである、こゝには多善根福德因縁と云ふことはないが、支那の襄陽石經の阿彌陀經には、一心不亂の下に「專持名號。以稱名故。諸罪消滅。即是多善根福德因縁。」と云ふ句があると云ふことである。原文にあつたのかどうか分らぬが、その意味に於ては間違のない所である。定散二善の少善根少福德の代りに大善大行の南無阿彌陀佛が勧めらるゝのである。

舍利弗よ、若し善男子善女人ありて、阿彌陀佛を説くを聞いて、名號を執持すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心不亂ならん。其の人命終の時に臨んで、阿彌陀佛諸の聖衆と與に其の前に現在したまふ。是の人終る時、心顛倒せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得、舍利弗よ、我是の利を見るが故に此の言を説く、若し衆生ありて是の説を聞くものは當に發願して彼の國土に生ずべし。

以上の本文を文面から見ると左の如くである。阿彌陀佛の御名を聞いてその名號を稱へることが、一日であつても、二日であつても乃至七日であつても、一心不亂に稱へるならば、その人の臨終には、阿彌陀佛は聖衆を伴ひ、その前に現はれたまふであらう、その人臨終に正念ならば、即時に極樂國土に往生することを得る。我は今この利益を證見したから「衆生若し是の説を聞かば應に發願して彼の國土に生ずべし」と説くのである。

文面から見ると淨土宗の學者の解すると同じやうに單に稱名を勧めたやうになるのである。大經の梵本や、唐譯の無量壽如來會は第十八願の本文が第十九願をも含んで居り、尙解しやうに依つては第廿願をも含んで居るやうに見える。假令それがそうあつても、第十八願の念佛往生の精神は儼然として存し、第十九願の諸行往生と第廿願の自力念佛とは自ら判別せられねばならぬのである。今この小經の正因段に於ても同じことで、一心不亂の執持名號を徳本とするならば第廿願の機となり、臨終現前の來迎を期するならば、第十九願の機となるのである。漫然とこれを混合しては念佛往生の第十八願意は成立たないのである。併し、こゝでは少善根少福德を排斥せられたのであるから多善根多福德の生因で衆生を導引する爲に、矢張り修諸功德（第十九願）植諸徳本（第廿願）の型に箝めて教へられたのである、この瓦礫と黄金とを見分るには純他力の念佛往生の願意から洞見せねばならぬ。觀經に隱顯があるやうに小經にも隱顯があるとせらるゝ親鸞聖人の味讀に由らねば解説は不可能である。顯説の上で言へば自力念佛のやうであるが隱彰の上から言へば正しく他力念佛である。顯の方面から云へば上に示したやうな自力の解説になるが、隱の方面から云へば全く他力の解釋となるのである。

第一に「聞説阿彌陀佛」とは名號の意味を聞きわけるのであるから聞信同義の親鸞聖人の解釋からすれば全く信心のことである。「執持名號」の執は、心堅牢にして移轉せざるを彰し、持は不散不失に名くとせられ、これも全く信心のことである。「一心不亂」も一は無二の意にして、心は眞實に名くとせられ、これも他力信心のこと



とである。此等は親鸞聖人が化土の卷に解説せられた片鱗を挙げたものであるが、斯く解して見れば自力の努力でもないやうである。こゝに「若一日、若二日、乃至若七日」とあるのは、「若」の字に依て一日でも二日でも乃至七日でも宜しいとすれば、第十八願に「乃至十念」とあるのも、本願成就文に「乃至一念」とあるのも、結局同じことで、善導大師の「上盡一形、下至一聲」の意も同じことである。顯説の上で自力念佛のやうに見えても、その實は隱彰の義で他力易行の念佛とせなくてはならない、そこでこの一段は第十八願の念佛往生の正因を示さんとせられたものであると云ふのである、聖衆來迎や、心不顛倒や即得往生は行者の得益を示されたのであるが、それに諸行往生の型が用ゐられて居るのであるから、これは第十九願の意とせねばならぬ。遂に世尊はこの大利益の存することを見届けて最後に「若有衆生。聞是説者。應當發願生彼國土。」と懇切に勸化せられたのである。

一〇 六方佛の證誠 一

東方—阿閼毗佛—須彌相佛—大須彌佛—須彌光佛—妙音佛—出廣長舌相—説誠實言—不可思議功德一切諸佛所護念經

世尊は今自分が彼の阿彌陀佛の不可思議の功德を讚嘆するやうに、東方にも恒河の沙の數ほどおもた數多おわする佛また達が各その自分の國土で廣長舌を出して大千世界を覆ひ、眞實の言を發して、「汝等生願は是の不可思議の功德を

稱讚する一切諸佛の護念したまふ經（小經のこと）を信ぜよ」と仰せられ、多佛の證誠即ち保證せらるゝ言を引いて信を勧めらるゝのである。

阿閼毗佛〔アクシヨーピヤ〕は無動佛と譯す、普通東方の教主とせらるゝのである。妙音佛は梵本には妙幢如來となつて居る、或は寫誤かも知れない。

三千大千世界とは現世界の如き小世界を千集めたのが小千世界、小千を千集めたのが中千世界、中千を千集めたのが大千世界、この全部を三千大千世界と云ふのである。一つの太陽系統を指すのである、これが一佛の支配下となつて居る、千界の思想は希臘にもあつたやうである。

一一 六方佛の證誠 二

南方—日月燈佛—名聞光佛—大焰肩佛—須彌燈佛—無量精進佛

南方は普通寶生如來の世界であるが、こゝにはこの佛は出て居ない。こゝに大焰肩佛〔アルチスカンダ〕と云ふのがある、肩に光炎のある佛である、これは北方にもあり又上方にもある、三度同名がある。波斯のゾロアスターの像は雙肩から燄光が出て居る、曾て肩に燄のある佛像が犍陀羅地方から出土したことがある、その時の發掘主任スプーナー博士は、大乘佛敎は波斯のゾロアスターの火敎から發展したものであらうと云ふ説を立てたこ



とがある。斯る主張は極めて淺薄であつて、阿彌陀經に燄肩佛が三度もあるのであるから燄肩の像があつたからと云つても、大乘が火教から源を發して居るとは謂へない、併し斯る佛名が起ると云ふのは或は肩に燄のある像の知識があつたであらうと謂ふことは成立し得るのである、須彌山を知らずして須彌光、須彌相、大須彌、須彌燈佛の如き名は起らない、但それは名のみのことで教の内容には相互關係はないのである、將來に於て屹度焰肩佛と火教祖との關係を説く人もあらうと思ふから豫めこゝに一言して置く。

一一六方佛の證誠 三

西方―無量壽佛―無量相佛―無量幢佛―大光佛―大明佛―寶相佛―淨光佛

西方の教主は無量壽佛である、阿彌陀佛を阿彌陀佛が稱讚せらるゝのは奇であるが、西方に無量壽佛がないのは尙更奇であらう、そこで他に准<sup>なぞ</sup>へて名を出されたとしても差支ない、又何れの佛も不可思議の功德あることは自認して居らるゝとすれば、自讚せられたとしても差支ない、又能讚の佛は化佛と見ても差支ない、何とか會通<sup>あつ</sup>は出来るであらう。

一三六方佛の證誠 四

北方―焰肩佛―最勝音佛―難沮佛―日生佛―網明佛

南方と上方とにある焰肩佛が北方にも出て居る。梵本には六佛以外に鼓音佛、作光佛がある。北方の教主は空成就佛であるが、ここにはこの佛は出て居ない。

一四六方佛の證誠 五

下方―師子佛―名聞佛―名光佛―達磨佛―法幢佛―持法佛

下方世界では法も重んぜられ、名譽も希求せらるゝ處であるから、これに因んだ名が多い。

一五六方佛の證誠 六

上方―梵音佛―宿王佛―香上佛―香光佛―大焰肩佛―雜色寶華嚴身佛―沙羅樹王佛―寶華德佛―見一切義佛―如須彌山佛

上方には佛名に意味のありそうなのが多い。星宿や香烟は上方特有と見ても、外の名は色々な解説も付きさうである。梵本には帝幡幢佛と云ふのが加つて居る、焰肩佛も第三度目にこゝに出て居る。



## 一六 聞經聞名の功德

一切諸佛所護念經—聞諸佛所說名及經名者諸佛護念—不退轉—願生彼國者亦不退轉—已生  
今生當生—信者願生彼國

小經の一名は一切諸佛所護念經である、護念は唐代の譯文では攝受となつて居る、梵語「パリグラハ」であるから大略同義である。一切諸佛の爲に護念せらるゝ經である、これは亦一切諸佛の攝受する經と云ふと同じことである。この經の名の起る所以は、彼の諸佛の所說の名即ち阿彌陀佛の名號とこの經名とを聞いた者は、皆一切諸佛の爲に護り念ぜられ、その爲に皆阿耨多羅三藐三菩提（アマッタラ・サムヤク・サンボーディ）から退轉しないと言かれてある。この梵語は無上正等覺と云ふ意味である、この上のない最上無上の覺位である、その覺は正しく完全に覺られたものであるから斯く名づけられたのである。これは又無上正遍知とも譯する。

佛はこの故に汝等當に吾が語る所及諸佛の說きたまふ所を信ぜよと懇切に勧められて、その上に又若し人あつて已に發願し、今現に發願し、將來に發願して阿彌陀佛國に生ぜんと欲するものは、皆無上正等覺から退轉しない地位に到ることが出来る、而してその發願の時に應じて、已に生れ、今現に生れ、若くは將來に生るゝであらうと保證せられ、更に若しこれを信する善男子善女人があるならば、必發願して彼の佛の國土に生ずべしと勧められてある。過去、未來、現在に渡つて念佛往生の功德の無限なることを詳らかにして心を西方に向けしめらるのである、發願も形式は自力的であるが、實は第十八願の欲生と同じく信樂しんぎやくの心から出た願生思想である。

## 一七 世尊に對する諸佛の稱讚

相互稱讚—不可思議功德—行甚難希有之事—五濁惡世成正覺—說一切世間難信之法—是爲甚難

この一段に於ては、世尊は諸佛の不可思議功德を稱讚せられ、諸佛は亦世尊の不可思議功德を稱讚せらるゝと云ふことを世尊自ら説きたまふ處である。然るに小經譯文には明らかに「而作是言」とあるが梵本には「イティ」（と言へり）の語が缺けて居る、そこでマクス、ミューラー博士は、釋迦牟尼佛能爲甚難以下の一文は阿彌陀經作者の言であるから、この經は釋尊の自說ではないと主張せられたが、つまり前來の各段が皆世尊の舍利弗に對して説かれた自說と見るより外に仕方がないので、こゝにも彼の諸佛も亦同じく我が功德を稱讚すべしとなるので餘儀なくこの文を佛說として東方聖書に譯出せられたのであつた。相互稱讚の段は實に有難い佛意である、初め世尊が阿彌陀佛を稱讚せられ、その通りに諸佛が阿彌陀佛を稱讚し、そのことを述べて世尊は諸佛を稱讚せられ、最後は逆に諸佛が世尊の不可思議功德を稱讚する、而してその稱讚の語が明白に直接言としてこゝに示されてある。世尊に對する諸佛稱讚の言は實に堂々たるものである。先づ釋迦如來の自覺を讚して左の如く語られて居る。釋迦牟尼佛は能く甚難じんたんげう希旨しきしうの事を爲された、作すに甚難く、世に稀れにある大事業であるとのことである。そ



れはこの娑婆（サハ一堪忍）國土に於て、而も五濁の惡世の中で、無上正等覺を得られたと先づその正覺を成ぜられたことを讚した、これは世尊自覺の讚嘆である。五濁とは劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁である、劫濁とは時代が全面的に濁つて居ると云ふことである、劫は長時であるが、こゝでは時代が末になつた時期を云ふので現時代と云ふと同じことである。時代が濁亂に向つた上に見濁がある、見濁とは生類の見識が濁つて身見邊見などの邪見が世に行はれるのを云ふのである、煩惱濁と云ふのは貪瞋痴の三毒の煩惱に依て濁惡に赴いて居るのを云ふ、衆生濁と云ふのは衆生の根機が衰へ身心共に鈍弱なるを指すのである、命濁は壽命漸く短く、遂に十歳までも減縮すると云ふのである。世尊の在世時代は斯くまで亂れた時代と云ふことは出来ないが、世尊の法が行はるべき現劫全體を含んで話してあるから、五濁増の惡時代の中で成覺せられたと説かれて差支ないのである。成覺その事が難作であることを第一に述べたのである。

第二には世尊は自覺せられたばかりでなく、覺他の事業を成就せんが爲に、諸衆生に對して、この一切世間に對して極めて信じ難き法を説かれつゝある。證の難事と教の難事とを合説して稱讚せられたのである。

世尊は更にその稱説を確認して、我は五濁惡世に於てこの難事を行じて得道し、一切世間の爲にこの難信の法を説くと復説して居られる、その上に語を添えて「是を甚難しと爲す」と宣せられた。大經には「若し斯の經を聞て信樂受持せんは難中之難にして此の難に過ぎたるはなし」と説かれ、親鸞聖人は同じ心を

一代諸教の信よりも

弘願の信樂尙難し

難中之難と説きたまひ

無過此難と宣べたまふ

と讚せられてある。



## 結文 流通分

舍利弗諸比丘——一切世間天人阿修羅等——歡喜信受——作禮而去

世尊が此の經を説き終らるゝ時、同開衆として會座に參した一同は舍利弗初め千二百五十人の比丘、一切世間天人阿修羅など皆佛説を聞き、歡び信受して禮を作して去つた、世尊説法の趣意が行はれて一座皆開法の利益を得て禮拜して退去したとのことである。觀經には天龍夜叉が出て居るが、小經は阿修羅が選ばれて居る。阿修羅「アスラ」とは魔神族であるが、最古吠陀時代には、或は天とせられ或は魔とせられ、所屬不明であるが、漸く魔性顯著となり、天中の主神因陀羅「インドラ」と大戦闘を開始するに至つた。而してこのアスラは波斯族にてはアフラ・マツダとなり天の主神とせられ、却てインドラを魔神として居る、この點より見れば、印度族と波斯族との分離は宗教見地の差から起つたものであるに相違ない。佛教に於ては阿修羅を六道の一とし常に鬭争を事とする魔族とするのである、スラは天又は酒と云ふ字であるから、アスラを非天と譯し、又非酒とも譯するがこれは何れも俗説語源である、アスラは生靈的存在の意である。こゝに開法信受の對象として、人天の外に唯一つ阿修羅の鬭争魔族のみが摘出せられてゐるのは、斯る惡魔も亦法悦の境地に參入するの特權あることを示された極めて當代に適した流通分である。

### 阿彌陀經逆讀講讚

今試みにこの阿彌陀經を逆に終から始に向つて讀み返し、一言にして言へば小經を逆讀することに依て、念佛成佛の眞宗を味ふことも、亦法悦の一助となるであらう。

釋迦牟尼佛は、娑婆國土に於て、五濁惡世の中で、無上正等覺を得られ、諸衆生の爲に一切世間難信の法を説きたまふ。(一七)

その法は一切諸佛所護念經と名づくるもので、その諸佛の稱讚したまふ佛の名は阿彌陀佛である。この佛名及經名を聞く者は、諸佛に護念せられ、無上正等覺に於ける不退位を得、更に發願して阿彌陀佛國に生れんと欲する者は同じく無上正等覺に於ける不退位を得て彼の國に往生するであらう。(一六)

六方世界の佛國には恒河の砂の數よりも數多おわする佛達が口を揃へて證誠しよっせつしたまひつゝある。他方諸佛の稱讚は即ち諸佛稱揚の願であつて、第十七願に相當するのである。本成就文の前にも十方恒沙の諸佛如來皆共に無量壽佛威神功德不可思議なるを讚嘆したまふとあるのと同じことである。(一五—一〇)

小經の文に、善男子善女人、聞説阿彌陀佛、執持名號、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、



若六日、若七日、一心不亂とあり、是人終時、心不顛倒、即得往生阿彌陀佛極樂國土とあるのは、正しく第十八願文の十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺とあると同じことで、本願成就文の諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉、とあるのとも少しの相違もない。文の當面から見れば、信前修求の自力稱名とも見え、第二十願の至心廻向欲生の願意であるから、表面から見れば小經はこの植諸徳本の法門を顯はすものとして差支ない、されど、この小經の廣本とも謂ふべき大經の趣旨から見れば、こゝに至心信樂欲生の願意が無くてはならぬのであり、又この文面も全く裏面から見なくても、深くその文意を味讀すれば、聞説阿彌陀佛は正しく聞其名號であり、執持は心の堅牢不失であり、一心は無二眞實の心であると云ふ親鸞聖人の釋に依れば、全く大悲廻向の信心に外ならない、乃至一念と云ふのも、乃至十念と云ふのも、下至十聲と云ふのも、若一日……若七日と云ふのも全く同一義となるのである。そこでこの第九段の本意は至心信樂欲生の第十八願であるが、前の第八段の少善根少福德と云つたに對し、多善根多福德の徳本を植える形式を生かして、表面は第二十願にも取れるやうに説かれてあるのである。今一つこゝに動きの取れない問題がある。それは其人臨命終時、阿彌陀佛與聖衆、現其前之文である、これは正しく至心發願欲生の第十九願の意である、即ち修諸功德の諸行往生の機に對したものである。こゝは眞實の隱顯のある處で、顯説では諸善

萬行を活かして説き、隱彰では正しく念佛往生を主としたまふ所である。要するにこの第九段には念佛往生の第十八願と修諸功德の第十九願と、植諸徳本の第二十願とを合せて啓示せられたものとして差支ない。

(九一八)

次には願生彼國の結果、彼の國に往生する者の資格が示されてある、往生者は悉く阿鞞跋致即ち不退轉位の聖者である、これは第四十七願と第四十八願とに於て誓はれた所である。已に初地以上不退轉の菩薩であるが、尙その上に多く一生補處に達し、その聖衆が實に算數の及ばざるほどある、これは第二十二願に誓はれた所である。(七)

極樂國の教主阿彌陀佛は光明無量であるから無量光佛と呼ばれる、これは前に述べたやうに第十二願である。又阿彌陀佛は壽命無量である、故に無量壽佛と呼ぶ、これは第十三願である、正しく極樂國土の正報莊嚴である。加之、その人民の壽命も亦無量である、これは第十五願である。こゝに十劫再成のことが一言加へられてある。これは時を定められたのであるが、實は無時の時であるから久遠と同じことである。彼の佛は無量の聲聞弟子を有し、多くの菩薩衆生も亦存在する、何れも算數の及ぶ所ではない。これは第十四願に誓はれたことである。(六)

次に化鳥風樹の極樂依報の莊嚴である、衆鳥は和雅の音を發して、五根、五力、七菩提分、八聖道分の法



門を演暢する、この法音に感化されて其土の衆生は念佛念法念僧を爲し、微風動いて行樹羅網を吹く時は、百千種の音楽を爲し、自然に念佛念法念僧の心を起さしめる。これは隨意開法の第四十六願に當ても差支あるまじ。(五)

次は天樂、雨華、他方佛供養など法樂の光景が叙せられてある、これは第二十三願第二十四願の意である。寶池、階道、樓閣、蓮池など、同じく極樂の依報莊嚴が説かれてある、これは第三十二願の意である。

(四一三)

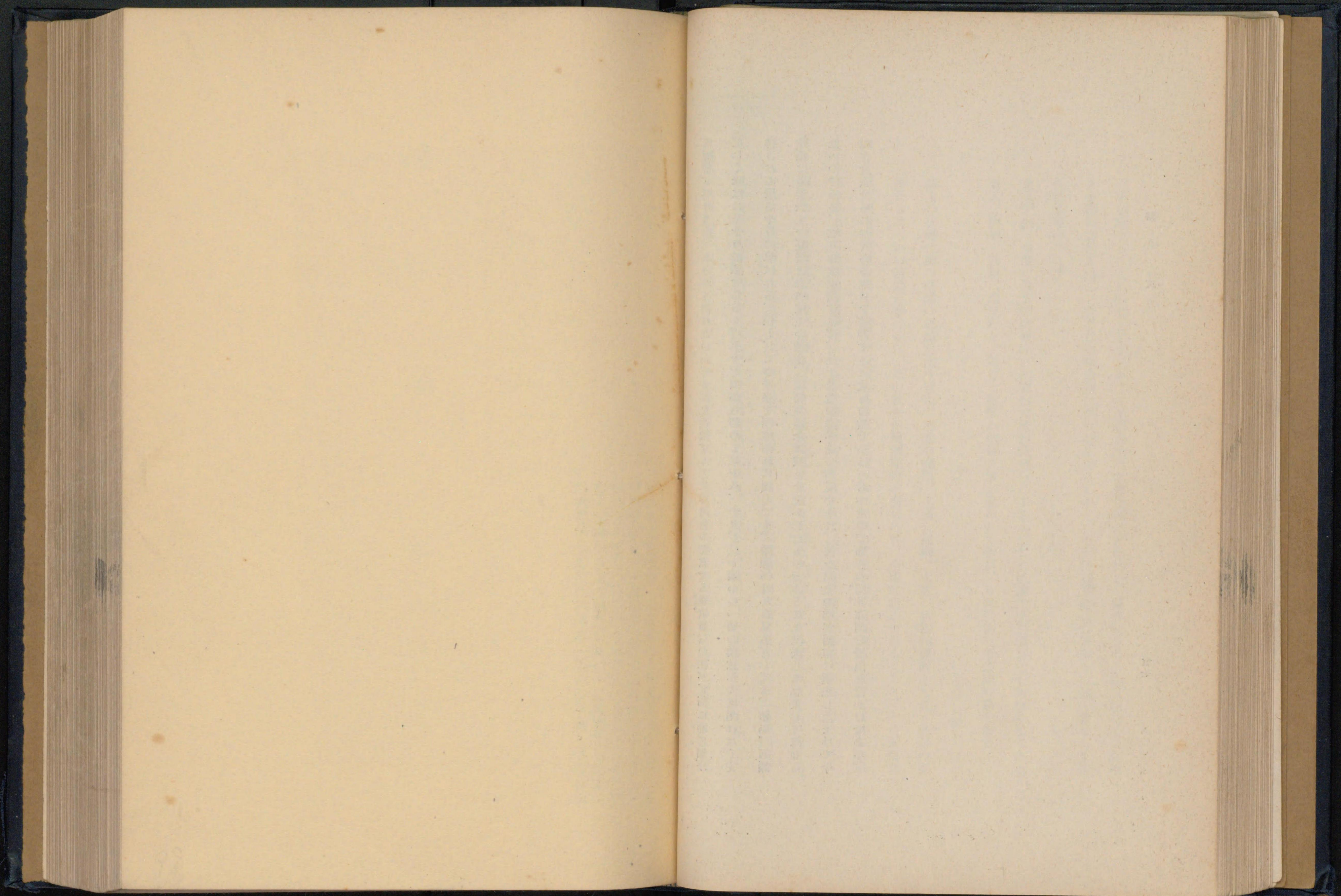
以上の正報依報の莊嚴の總結を示す爲に、七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹が標説せられ、衆苦の絶無なることから極樂と名けられ、その教主が阿彌陀佛と名けられ、今現に説法せらるゝこと、その極樂世界は西方十萬億の佛土を超えた彼方に在ることを述べられてある。此の如く正報依報の莊嚴を成就した嚴淨の國土が阿彌陀佛の極樂淨土であると歸結せられたとすれば誠に穩當な經文である。(二一一)

而してこの逆讀講讀の結果に依れば、その最初に出されたる祇園精舎の同聞衆たる千二百五十人の大比丘、舍利弗目連初め十六羅漢、文殊、彌勒以下の諸菩薩、梵天、帝釋無量の諸天族などは、皆彼の極樂國土に俱會一處の法樂を共にする諸上善人の實例であると見るべきである。

斯くて阿彌陀經一卷は順讀すれば、大無量壽經の要説であり、極樂莊嚴の縮圖であり、見方に依ては第二十願

に配當すべきものであるかも知れないが、これを逆讀すると世尊出世の正意たる難値難信ちんぎの法が正面に却て順序正しく味はれるやうに感ぜらるゝ、第十七願から初めて第十八、十九、二十願から一切の願意が大抵漏れなく安排されて居るやうに思はれる、但し、この一卷を順逆何れに讀んでも、隱顯何れから見るとしても、結局、阿彌陀經は極樂依正の莊嚴と念佛往生の勸化、諸佛の護念證誠とを説かれたものであることは決して忘失してはならないのである。唯これを逆讀すれば、此土發遣の佛が先づ應現せられ、彼土招喚の佛が西方に鎮座したまひて今現在説法せられつゝある光景を瞻仰するに最も自然であると考へたので知らぬ似非法門えせを提出したわけである。







聖典講讚全集第四回配本・昭和拾年參月拾參日印  
刷・昭和拾年參月二十日發行・編輯者宇野圓空・  
發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎  
印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・  
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎